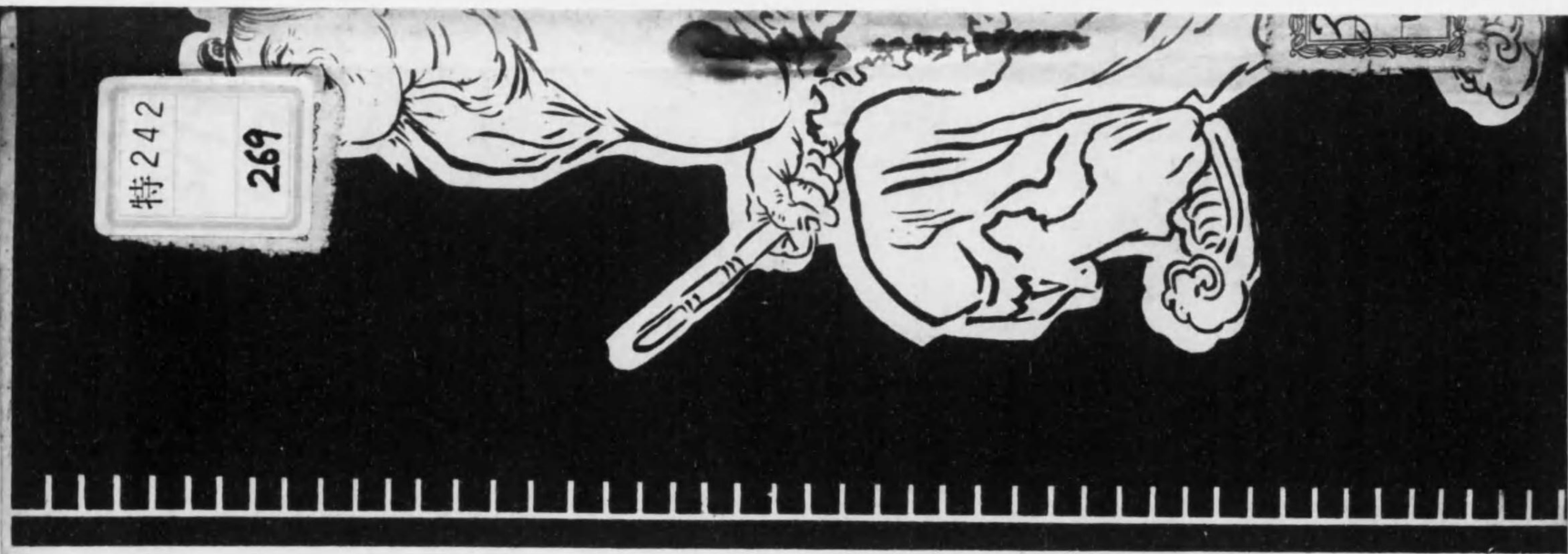
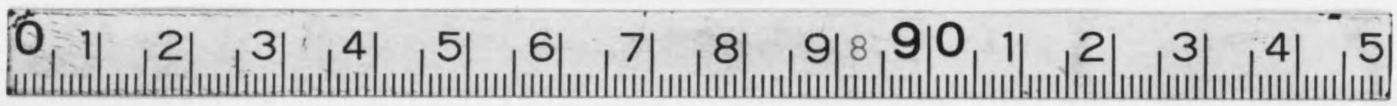
殺人事件に使用

国枝史郎著



特242
269



特242
269

駒澤大學教授・鶴見高等女學校校長
中根環堂著

家庭に活きる宗教

和光社

目次

序……別一
一、日常生活これ宗教……一
二、家庭の宗教的整頓……八
三、家庭生活の和樂……一四
四、主婦の宗教的勤め……一六
五、食事の宗教的心構へ……二四
六、家庭に於ける宗教的行事……三三
一、朝夕の禮拜……(三三)　二、祖先の佛事……(三四)
三、釋尊の記念日……(四二)
七、日々の修養……五三

序

國家興隆の本は、國民の精神が剛健であり、銃後後援の基は、家庭の生活が健全でなくてはならぬ。

國家百年の大計も、國民に剛健なる精神がなければ幻影に等しく、銃後完璧の施設も、家庭に健全なる生活がなければ水泡に同しいのである。剛健なる精神を養ふに、宗教に如くものなく、健全なる生活を爲すには、禪に越すものはない。宗教的信念を以て國家の興隆を圖り、禪的修養に依つて家庭の幸福を期せなくてはならぬ。

吾人はこの意味に於て、常に宗教を談じ、禪を論じて、國家、家庭に及び、そして成つたものが、「家庭禪」、「家庭の宗教」、及び「家庭の禪」等である。今此

等の書の粹の粹を蒐めて、日常の家庭に必要なる部分を綜合統一して、極く平易に解りよく、手頃のパンフレットにしてくれとの、和光社の切なる要望に因つて、茲に「家庭に活きる宗教」と銘を打つて、世に出した次第である。

固より浅學菲才、能く其意を竭さゞるを憾みとする。讀者諸氏幸に諒とせよ。

昭和十二年孟冬

澁谷橋畔にて

中根環堂

家庭に活きる宗教

中根環堂

一、日常生活これ宗教

宗教は寺院や教會堂にのみあるものでなく、街頭にもあれば山嶽にもある。天地悉く宗教の道場であり、宇宙皆信仰の殿堂である。既に宗教は何れの所にもあるとすれば、家庭には又家庭の宗教がなくてはならぬ筈である。然らば如何なるものが、家庭の宗教であるかと云へば予は茲に日々各自の家庭に於て行ふべき、實際の勤行を謂ふのである。決してむづかしい教理を論ずるのでなく、勤行そのものが眞の宗教と信ずるのである。

由來宗教は、理論や教理の研究に依つて、その本質、眞髓を體驗し得るものではない。よし教理や學問は少しも知らなくとも、若し、その人が日々怠らず勤行に勵み、精進して餘念を雜

へず、逆境に處して驚くことなく、順境に居て驕ることなく、常に平々坦々として途を行くが如く、安心決定してその日その日を送るならば、その人は信心獲得の、眞の佛教徒、眞の人間と言ふことが出來るのである。

これに反して、如何に多くの知識があり、如何に萬卷の經卷に通曉して居るとも、その人の行狀が修まらず、利慾の爲に節を變じ、名譽によつて行ひを改め、表に美を飾るも、裏に醜を演じ、常に悶々の情に堪へずその日を送るならば、その人は到底信仰の人でもなければ、又佛教徒でもない。

眞の宗教信者とは、穩かな心持ちで、同情厚き利他行を行ずる人である。されば宗教は研究でもなく、理窟でもない。要は日々の行持である。行持さへ眞實圓滿ならば、眞の宗教信者であると謂ひ得るのである。

日々の行持を圓滿に遂行し得る所は家庭である。眞の佛教修行は、寺院にあらず殿堂にあらず、卽ち家庭である。家庭は宗教の道場であり、修行の禪林であらねばならぬ。朝起るより晩

寢るまで悉く宗教的でなくてはならぬ。故に私はこゝ數十年來家庭禪といふことを提唱して居るのであるが、その主意は我々の家庭生活を禪的に潤色することである。卽ち家庭は我々人間の魂の安息處であると共に、又活動の發源地でもあり、同時に又我々人間の社會的生活には基本的地盤をなすものであるから、若し眞に禪を實踐しようと思ふならば、當然この家庭にまで引入れなくてはならないといふのである。天下國家の爲に働き、或は又社會公共の爲に滅私奉公の誠を致す樣な人でも、その家庭を顧ふと案外亂脈を極めて居る場合が少なくない。尤も昔から眞に偉人、賢聖といはるゝ程の人は大抵その家庭もよく治つて、內外相呼應して盡忠報國の赤誠に統一せられて居るものであるが、最近の重役とか、一代に產をなした所謂成功者の中には、隨分と素れた、情ない家庭が少なくない。主人は堂々として、實業界や政界に羽振りをきかせて居るが、家庭に入つて見ると、奧樣はヒステリーで、御情で學校を卒業した子供は不良放蕩、長男はカフエーや待合に通ひ、長女は男の友達を連れて女王樣のやうにしてレビューやシネマに遊び廻る。學校に通つて居る次男は喫茶店やダンスホールに皆勤で學校からは

いつも注意書が來る、などゝいふ樣な始末で隨分と新聞の社會面を賑はす場合を見受けるが、こんなのは、その家庭の人々が、毎日不愉快で、憤悶に明け煩悶に暮れて行くといふばかりでなく、それは又同時に社會に大きな害毒を流して、正しい人間の道を害ふものである。殊に最近はさうした事件が目立つ樣に感ぜられるので、私は機會ある毎に家庭禪を提唱して、先づ家庭から禪的に訓練し、堅實な家庭を造り、延いては社會全體を質實剛健に導き度いと考へて居るわけである。

そこで先づ家庭といふものを考へて見ると、家庭は兩親兄弟子女といふ、世の中で最も親しい血族關係の家族が同一家屋に同居して、一種の社會生活を營むところである。日本は家族制度の最も麗しい國であるといふが、こゝでは社會生活に疲れ切つた魂も、溫かい肉親の懷の中に抱き取つて慰められようし、又雄々しく社會に鬪つて生きようとする人には溫かい親兄弟の聲援があつて益々奮然として勇往邁進する活力を與へられるのである。喜びにつけ、悲しみにつけ、樂しいにつけ、苦しいにつけ、すべての場合に家族全體が一つになつて共に喜び、

共に惱み、溫かい愛の抱擁の中に人間を育てゝくれる處である。だからこの家庭生活が幸福であつてこそ始めて人間は眞に幸福な生活を營み得るものであらう。

支那の儒教では修身齊家治國平天下と稱して、身を修めることを第一に主張するのであるが我が國の樣に家族制度の美しい國では修身も治國も齊家が中心でなくてはならない。親は子を鑑として反省し、子は親に從つて人格を修養する。そして親子兄弟一丸となつて修養鍛錬するならば、それこそ我が國に相應しい修養の道である。

昔から「家亂れて孝子あり、國亂れて忠臣出づ」といはれてゐるが、この樣な孝子は悲劇である。家亂れずして常に孝子の充滿するところ、天下泰平にして忠臣の橫溢することこそ我々の願ふべき樂土でなくてはならない。その意味に於て禪に依つて家庭を齊へ、家庭をして常に孝子、忠臣の住處とすることこそ私の提唱する家庭禪の目的である。

禪と言へば非常に高尙なもので、普通の人の寄り付くことも出來ない樣に考へるものもあるが、眞理は平凡であると云ふのと同じで、禪ほど平凡なものはないといふことも出來る。禪は

未來の往生を說くのでもなければ、過去の穿鑿をするものでもない。現在の一擧手一投足すべてが眞劍に、眞面目に出來るならばそれでよいのである。故に、威儀卽佛法と言うて、日々の行ひが直ちに佛法で他に佛法といふものはないといひ、禪では吾々の日常生活そのものが、直ちに禪であり、佛法の全體であると主張して、若しその外に禪を求めようとしても到底求め得るわけのものではないといふ。石頭禪師が「觸目道を會せずんば足を運ぶも焉ぞ道を知らん」と語つて居られるのもやはりこの意味である。從つてその意味からいへば、水を運ぶも禪、柴を採るも禪、米を淘ぐのも味噌を擂るも禪、我々の行ふ處が悉く禪である。だから禪に於ては「常に脚下を照顧せよ」といひ、又「脚下黃金の地」ともいふのである。平常底が悉く佛法であり、禪であるから、佛といふも淨土といふも、決してこの自己を離れて存在するものではない。從つて唯心の彌陀、己心の淨土ともいへば、庭前の柏樹子、麻三斤、或は乾屎橛ともいうて、佛さへ有難いものでも世間離れのしたものでも又珍しいものでもないといふ。然るに世間では往々にして禪を誤解して、何だかえらい難かしいものと思つたり、人の意表に出る奇

言奇行が禪である樣に考へるがそんなものは所謂野狐禪である。平常心が是道であり、法である。故に總持寺の開山瑩山禪師は禪の極意を道破して「茶に遇うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す」といつて居られる。卽ち眞に人格の修養が出來、眞面目に人生を生きる人ならば、その日常の行ひそのまゝが禪である。家庭に於てする臺所の炊事も食事の仕方も、厠の掃除も執務に算盤を彈くのも、佛前の讀經も香を炷いて坐禪するのも同じ樣に禪の面目となつて來るのである。

然しそれは決して、いゝかげんな我々の生活が禪だといふのではない。それを禪といふにはその爲す事が法の如く正しくなくてはならぬのである。お茶を一杯飲むにしても如法に飲んでこそ禪であり、下駄一足脫ぐにも正しく揃へて脫ぐやうにしてこそ禪である。そこで禪の立場からいへば、如何なる些事といへども粗略にせず、又如何なる大事といへども勳ぜざる樣にせねばならぬ。禪の妙味は實にこゝにあるのであつてその行ひたるや、如何なる場合にも報酬の念があつたりしてはならぬ。全く無條件、無報酬の誠心誠意より出でたものでなければならぬ

然るにそれが爲さねばならぬから爲すとか、仕樣がないから動めるとかいふのでは、そこには仕方がないからとか止むを得ないからとかいふ心持が動いてゐるから決して禪とは言へないのである。何をするにも悅び勇んでなし、その行ひに興味を持つて熱心に行ふといふ樣でもまだ眞の禪とはいへないのであつて、是を禪といふには最早そんな境地を通り拔けて苦しいとも樂しいとも思はず無爲無作にして其の事が行はれなければならぬ。この心境に於て家庭の生活を營み得るならば私の家庭禪の最後の境地に到達してゐるといへるのである。そこで私はこの家庭禪を實踐する爲めに、先づ家庭生活の整頓から說き始め度いと思ふ。

二、家庭の宗教的整頓

禪的家庭生活の第一要件は家庭生活の整頓である。家庭ほど雜然として纏まりのつかないものはない。親、兄弟が互ひに融通し合つて生活してゐるのが家庭だから、そこには或る程度の我儘も許されると同時に又或る程度の拘束も受ける。そして狹い場所に多くの人々が生活してゐるのであるから、有無相通じて便利なこともあるが、四疊半の下宿生活と異ひ、雜然として何がなんだか判らぬこともある。朝起きて自分の帶を探す爲に家中の者が、ひつくり返す樣な騷動を演ずることもあれば、朝學校へ行く時になつて大騷ぎをして帽子を探したが見當らないので仕方なしに帽子なしで登校したといふ樣なことは兄弟の多い家庭では間々見受けることである。それでは決して禪的生活に踏み出す資格がない。

禪では先づ第一に環境の整頓といふことを敎へる。道元禪師は「高所は高平に、低所は低平に」といふことを敎へられた。卽ち高い所にあるべきものは高い所へおく、低い所におくべきものは低い所におく、それが禪の端的な面目であるといはれたが、本は書棚か本箱に、インキやペンは机の上に、スリッパは廊下に、庭下駄は靴脫ぎの上に、便所の草履は便所の中に、正しくあるべき樣に整頓することがその主意である。

最近は家庭衛生とかいつて、便所や流し場を淸潔にすることを心ある人々は口喧ましく注意する樣になつたから餘程よくなつたけれども、然し色々な家庭を訪れて見ると便所の掃除がし

てなかつたり、手洗ひの柄杓が向ふの方へ飛んでゐたり、御不淨の手拭が汚れてゐたりして、そこの家庭が隨分立派な家にもかゝはらず甚だ教養の少いことを思はせる場合がある。そんな時私はその家の主人夫妻の心の中が見られる樣でさみしく感ずる。それではいくら着飾つてゐられても、大したしろものではないと思へてならない。反之、さゝやかな家でも庭の掃除から家具調度の整頓も出來、佛壇までもきれいに掃除の行きとゞいた家を訪れると身體の引しまる樣な感を受ける。禪的な家庭といへば誰でもすぐそこの主人も主婦も禪にこり固まつてゐて、そこを訪問でもしやうものなら、頭から「某甲訪問の一句作麼生」などとやられる樣な家を考へるのであるが、そんなのを私は禪的家庭と名づけない。寧ろ野狐禪である。それより玄關に立てば街燈もきれいに蜘蛛の巣を掃ひ、箒の跡もすが〳〵しく打水をして呼び鈴をならして戸を開けるとたとへ切り張りした障子でも、塵一つない土間に下駄が正しく揃へてあり、現れた女中さんも、身だしなみの正しい風體で、禮儀正しく取次がれ、やがて來意をつげて座敷に通され、家中の掃除は勿論疎末ながらも家具調度の手入れも行きとゞき、床の間の置き物、

掛軸、一輪の投げ入れの花まで主人の床しい心を物語つてゐる樣な家こそ、眞に禪的家庭といふべきである。

さうした家庭では主人から子供女中に至るまで朝は規則正しく起き出で、一家こぞつて掃除をし、家の中の整頓から、各自の身なり服裝の整頓も出來、正しい心で佛前に讀經禮拜して後食卓につき、各々餘裕綽々として主人は出勤し、子供は學校に登り、主婦は下女を指揮して家事を落度なくはこび、子供や主人の歸宅を誠心こめて迎へられるに違ひない。そして又一家揃つて佛前に禮拜をして樂しい團欒の中に夕食を取り、平和な雰圍氣の中に寢に就かれることであらう。

斯ういふ家庭こそ眞に禪の家庭であり、平和な、而も宗教的安心に充ちた家庭である。この平和な樂しい家庭生活は精神的にも、經濟的にも、生活それ自身にもすべてが正しく整理せられ、「高所は高平、低所は低平」の宗旨をそのまゝ實行してゐるわけである。然し我々の生活を反省して見ると中々さう理想的に生活が整理せられ、常に坦々たる大道を歩む樣なわけには行

かない。つい心ならずも懶け癖が出て來る。まづこの仕事は明日にしても差支へあるまいと來る。手紙の返事も明日にしよう、この片付けも今日やる必要はあるまい、などといふ具合になつて我々は自分の家庭生活を整頓するのに何から手をつけていゝか判らぬ位になつてゐる。例へば朝六時なら六時に起きるといふことさへ中々實行出來ない。そして出勤間ぎはになつて大慌てゞ御飯をかきこみ、靴や帽子を忘れて飛び出す、ネクタイを忘れて走り出すなどといふことは決して少い例ではない。それでは禪的家庭の人とは何うしてもいはれないのである。況んや主人は妾狂ひ、主婦は家を外に戀の火遊び、子供達は我儘勝手の仕放題などといふ家庭は寧ろ家庭ではなくて、仇敵の寄合所といつた方がよからう。そんな所に禪は生きないのである。禪は何處迄も人間の道、正しき人間の推進力ともいふべきものであるから、正しき人間生活を誤りなく實行出來るならば殊更禪といふ必要はないのである。だが、誰しも正しき人間の道といふもの丶、仲々實行し難いものであるから、それを禪的修養に依つて實行し、遂はざる生活を正しい生活、力强い生活を打ち建て丶行かうとするのである。その爲に家庭にあつては先づ第

一に生活の整頓に着手して、禪的生活の第一歩とするわけである。

禪堂に於ける雲水の生活は何よりも規律が正しい。我が國では規律の正しい代表は軍隊生活である樣にいふが、禪堂の生活はそれ以上に規律が正しいのである。雲水は皆疊一疊をその生活の世界としてゐるから、この狹い世界にあらゆる生活必需品を列べ、すべてのものに十二分にその效用を發揮せしめて生活してゐるのである。これは禪的にいへばあらゆるものが全分の價値に於て存在することを如實に體驗の上に於て把握することであり、その絕對價値からいへばすべてが佛も窺ひ得ない價値に於て存在することを味得する所以である。家庭に於ても各人が絕對價値の所有者として尊敬し合ひ、正しく人生を生きるのみならず、家具調度から手拭一つ、たわし一箇に至る迄その全分の價値を發揮せしめる樣に生活しなくてはならない。その爲に先づ家庭全體に亙つて、人間も、道具も、子供の玩具も、すべてを整頓して生活する必要がある。そして餘計のものを持たない樣に、又すべてのものの價値を充分發揮せしめる樣に努力する。そして廢物利用などといふことは禪的生活に於ては是非とも必要な要件であるといはね

ばならぬ。從つて禪的家庭生活は、いはゞ精神的にも物質的にも最も經濟的な生活であるといふことも出來るであらう。

三、家庭生活の和樂

家庭は家長(主人)を中心とした社會團體であるといふが、禪的家庭は恰も禪寺に於ける住職を中心とする叢林の樣なもので、主人は住職であり、主婦は鑑寺、副寺等の役寮を兼務してゐるやうなもので、子供達は雲水にも比すべきであらう。主人は何處迄も老婆親切心を以て子供達を育てなくてはならない。道元禪師は典座敎訓に於て、「住持人を始め、諸知事は三心を以てゐなければならぬ」と誡めて居られるが、それはやがて家庭生活に於ては主人、主婦、年長者の心がけであつて、喜心・老心、大心こそ、これ等の人々の最も必要な敎訓である。

喜心は日々の境遇に滿足し、今日の生活を喜ぶ心持であり、老心はすべての人々に對して慈愛の心を持つこと、大心は不動山の如き心で、小事といへども侮らず、大事といへども勵ぜ

ざる心である。一家の中心となつて多くの家族を支へてゐる主人、主婦等が、徒らに子供の愛に溺れたり、現在の生活等に不滿を抱いたりしてゐては決して子供達によい影響を與へるものではない、自分達には餓じい思ひをしても笑つて子供達に食物を與へる親の愛こそ人間の最も尊い姿である。涙を拂つて馬謖を斬る心、肚の中では涙を流しても可愛い子供を旅に出す勇氣は所謂大心といふものであらう。かうした心があつてこそ、子供は立派に育ち、家庭は平和に治まり、御國の爲にも御役に立ち得るのである。

兩親のこの大きな愛に抱かれて、子供達は敬愛の心を生ずるであらう。子供としてはたとひ親は親たらずとも子は子でありたい。その爲に道元禪師が示された樣な「對大己法」の精神などはよき範例であるが、それは要するに年長者に對しては何處迄も恭敬を守り、謙讓であり度いといふことである。この心こそやがて平和と宗敎とを生み出す力であるからである。卽ち長上に對して敬愛を持する者は爭ひを知らないのである。又長上に對して謙讓なる心はやがて佛や神に對する敬虔に通ずる。家族が神佛に對して敬虔の誠を致す心は、子供の時から父母に從

順にして上を敬ひ下を愍れむ心を養はれてこそ次第に育まれて行くのである。日本宗教學の泰斗姉崎博士の如きも幼い頃祖母の膝に抱かれて佛樣を拜むことを敎へられたのが、その研究生活の出發點になつたと語つて居られる。禪もそれと同じく、決して佛を呵し、祖を罵る大言壯語を以て禪の達人といふことは出來ない。神佛に對して敬虔なる者こそ眞に禪の達人であることを知るならば、家庭生活を生かすものはかうした心構の必要なこと位は直ちに首肯せられるであらう。

要するに一家を上げて祖先を祀る佛壇を中心にして精神的に纏め上げられる樣に努力するのが、家庭禪の中心的方向である。その方向に大乘的に一致する心こそ大心であつて、子供にあつては恭敬の心である。この大方針を確立して居るならば、家庭は常に樂しい團欒の園となり子女が家を外にし放浪する樣なことは決して發生しないであらう。

四、主婦の宗教的勤め

次に家庭は主婦が中心であるといふことから考へると、主婦たる人の心構へは家庭禪に於ては最も重要なことになる。そこで主婦の任務といへば、食物の調理と、洗濯裁縫に依つて家族の着物を見ること丶、子供の敎育等、である。これについて、禪的見地から考へるならば道元禪師の典座敎訓などは最もよく食物調理に對する敎訓が語られて居ると思ふ。洗濯、裁縫などといふことや子供の敎育といふことについては纏まつたものはないが、その根本精神だけは充分に窺はれる。衣服の整理については物を大切にする精神から、何處迄もまめ〳〵しく親切丁寧にしなければならず、子供に汚れ綻びた着物を着せ、自分だけ白粉をつけ、萬艶飾で居るなどゝいふのは決して禪的精神ではない。衣服は粗末でも清潔、家族一同が正しい服裝で居られるやうにするのがその根本精神である。

子供の敎育については學校敎育に缺けてゐる宗教敎育が根本であるから、祖先のお祭りから年中の佛事法事を如法に營むことがその根本であらう。成績の惡い子供や試驗前の子供などを佛前に連れて行つて祖先や佛前に對して誓つて勉學せしむるなどといふのは、人の母たる者の

最も床しい宗教々育である。

そこで先づ家族一同が一緒に楽しく、感謝に充ちて頂く食物の調理について道元禪師の心得の概要を紹介することにしやう。

道元禪師に從へば、食事を頂戴する毎に五觀の偈を唱へ、自然に禪味を體得すべきであると述べて居られるがそのやうに多くの家族が恭しく頂戴する食事であると思ふならば、お蔬菜の大切なることは申す迄もなく、之を頂戴する家族一同の心を想ふ時、そこには自から敬虔な宗教的態度と親切丁寧清潔といふ心掛が出て來るであらうのみならず、道元禪師に從へば之を營辨する人はその仕事の中に自ら覺醒することによつて佛作佛行となる。卽ち人の厭ふやうな炊事ではあるが、直ちに以て自己の人格を完成する手段となすことが出來ると申されて居る程である。そして禪門では古來有德のお方でなければ臺所の主任ともいふべき典座にはなれないことを敎へられてゐる。

福澤先生は「能く一家の料理をなすものは天下を料理するに足る」と喝破せられて居るが寔に至言である、一家の主婦たる人は勿論、總て炊事に從事する人々は、この點をよく自覺し、「この一つのお汁を拵へることがやがて自分の人格のみならず、家族一同の人格をも完成する緣になるのだ」といふ覺悟で、お炊事に當つて戴き度い。況んや女中任せにして、主婦たる者が、お炊事に行けば、奥樣の沽券にかゝはる樣に思つて居るなどは以ての外といはねばならない。さういふ主婦に限つて暇に困り所謂有閑マダムの害毒を流し、家族のみならず社會にまで迷惑をかける樣になるものであるから、少くも主婦たるものは家族一同が戴く食物にだけはやさしい心をこめて調理して戴き度いものである。

調理の上に於ける心構へで、最も大切なるものは、物そのものを活かして用ふる事である。此の理が判らなければ、決して多くの人々の滿足する料理は出來るものではない。物を活かして用ふることの根本は物を粗末にしない事である。粗末にせぬといふは、物をしみをする事とは異る。惜しむ心は貪る心より生ずるのである。粗末にせぬ心、大切にする心は、宇宙の本體に徹する正しい愛の心より生ずるのである。

道元禪師のお示しになつた典座教訓の中には、「之れを護惜すること眼睛の如くせよ」とか或は「之を敬重すること御饌草料の如くせよ」と申されてある。人間の體で何處とて粗末にしてよい所はないが、眼程人の大切にする所はあるまい。一寸塵が這入つても大騒ぎして洗つたり拭つたりするのである。これと同樣に食物の材料を大切に心得よとの御誡である。女の方々はともすれば衣服や裝身具などを、命よりも大切と心得、指環の一箇でも失ふならば、寢ても覺めても寢言にまで忘れ得ない程である。或はどんなに苦心しても年と共に當然衰へて行く容色を惜しんで、白粉だ紅だと騒ぐ、こんな人に限つて食物など大切にしさうにも見えない。

故に、道元禪師は之を自分の眼の如く心得よと申されるのである。或は丁度天子樣に奉る供御となるべき品々の如く心得よと申されてある。道元禪師の開かれた永平寺には「杓底の水」と言ふことがある。道元禪師は朝顏を清められる爲に汲み上げた一杓の水も、之を全部用ふることなく、半杓を用ひて顏を洗ひ、殘る半杓は兒孫の爲にと必ず元へ復されたといふことである。禪師の御住居は現在の永平寺であるから決して料金を拂ふ水道の水ではなく、山から不斷に湧き出てくるものを用ひられたのである。その不斷にあるものでさへ大切に心得、半杓を殘されたお氣持は、何物にも譬へやうもない尊い床しいものである。此の道理が判つてこそ禪の味はひが判るのである。

宇宙の本體は絕對界で對立はない。對立の世界には人と物との區別があるが、絕對界では物も人も一如である。用ひて居る我も用ひられて居る菜の葉も一如である。故に小さき菜の葉なりとて粗末にするならば自分自身を粗末にするものである。自己を大切に思ふ心は同時に他を大切にする心であらねばならぬ。愛と言ふも此處まで徹底して來なければ眞の愛ではない。他を愛することは既に己を愛することになる所に眞の無我愛があることを考ふべきである。此の無我愛で凡てのものを愛する、そこに始めて眞に物を大切にする心が起つて來るのである。かう考へて來ると、日々のお炊事の中にさへ自分の心持一つで直ちに眞理に浚入し禪に徹することも出來るのである。

次に臺所の仕事に最も大切なることは又整頓の一事であらう。

お膳、お櫃、お椀その他種々な器や道具類を片付けるにしても、心をこめて綺麗に洗ひ、がやがや騒がしく音を立てたり、鼻唄を唄ひつゝやる樣では、とかく手が疎そかになつて過を生じ易いものである。

先づお食事が濟んだら食器類は靜かに、丁寧に下げて、清潔な水で洗ひ、よく水を切つて、乾いたふきんで叮寧に拭き戸棚や箱にきちんと片付けて、それから次の食事の準備をしておく御飯を炊いたお釜は食事の前にきれいに流して磨いておく。使つたふきんはすぐその手で必ず竿なり、ふきんかけに掛けて乾かしておく。食器を洗つた桶も、きれいに流して、乾かしておく。流し場もきれいに流して、御飯粒や、枯れた菜葉がごろ〳〵してゐない樣にきれいにしておく、そして茶碗は戸棚に、箸は箸箱に、ふきんはふきん竿に、桶は流しの棚に、お釜はかまどに、雑巾は雑巾竿にすべてあるべき處に整頓しておくのである。これは最初に述べた家庭の整理をお炊事場で實踐したまでゝあるが、主婦にこの整頓の心掛けがなくして、何うしてその子供や家族に整頓を敎へることが出來やうか。かく整頓しておいてこそ、いざお調理だといふ

時にはまごつかないで、手順よく、而も美味しく調理することが出來る。お蔬菜を調理して、火にかけてから、お醬油がなくなつたといつて、お醬油屋へ電話をかけたり、走つて行つたりするやうでは、美味しい御料理も出來ないばかりでなく、その爲に家族一同を不愉快にし、自分の德を損じ、或は免職になつたり、追ひ出されるやうな始末にならぬとも限らぬ。小事と雖もゆるがせにしないといふのは、この邊で充分味つて置いて戴き度い。この道具器物の整頓といふことや、お料理の手順を順序よく、まごつかないでやるといふことが、卽ち禪の極意であつて、それがやがて、大事に逢着しても泰然自若として動じないやうな心を自然に養ふ所以になるのである。而もそれは禪の極意といつても決して難しいことではなく、お炊事なり、お裁縫なり、そのなすべきことを忠實に、誠心をこめてやるといふ以外に何もないのであるから、まじめに、正しく、そして心强くこの職責を果して居られる人ならばそのまゝ禪の極意を體得して居られるといふことが出來るのである。

五、食事の宗教的心構へ

禪の實踐は決して遠い極樂淨土の欣求にあるのではなく、極く卑近な自分の脚下に注意する處から始まる。例へば禪に「脚下を照顧せよ」といふ言葉は、それを實踐的に見る限り、自分の下駄の脱ぎ方から、歩き方にまで心を配して、決して疎漏のない樣にすることである。佛樣だつたら下駄一つ脱ぐにも斯うせらるるであらうと思ふ樣に、自分が佛樣になつた心算で、その起居動作をするわけである。さうした心持で一家を考へるならば、食事こそは一家が揃つて食卓につき、心から一つになつて頂戴する時であるから、先づこの食卓に於ける禪的修養から家庭實踐の第一歩とすることにしよう。

食事は一日として缺くことは出來ないものであり、如何なる家庭でも必ず食事の時間を持つてゐる。尤も晝食は仕事の關係上家族揃つて頂くことは難かしいかも知れないが、朝と夜とは人々の心掛け一つで大體一緒に頂戴することが出來るものである。故に此の機會を利用して禪

的訓練の第一歩としたいのである。

食事の大切な事は言ふまでもない。之に依つて我々の生命を保つのであるから、古來から食事に就いては如何なる宗教に於ても最も大切に考へてゐる。クリスト教の家庭などでは必ず夕食の時には父が立つて御祈りをする樣であるが、禪に於ても必ずこれを實行しなければならない。即ち食事が大切であれば之に對して尊敬の念を拂ひ、感謝の意を表して、今日の糧を頂戴し、生命の源泉を養ふことの出來るのは、偏へに天地の惠みであり、御佛の賜ものであると、有難く禮拜の誠を捧げて、讀經なり祈禱なりを至心に勤めて、食物を頂戴するのである。さうすれば自然心の奥底より勿體ない、濟まない、闇が當る、冥加に盡きるといふ精神が湧き出て日々感謝の意を以て、其の日を幸福に暮すことが出來る。

そこで道元禪師の赴粥飯法などといふ書物を見ると禪師の食事に對する親切なる御誡しめを窺ふことが出來るのであるが、その中に尤も注意すべきことは食事の時には家族全體が必ず一緒に頂くといふことゝ、食物に對して感謝の念を抱いて、決して不平を持たないといふことで

ある。

家族が揃つて一緒に食事を頂くといふことは、上流の家庭では中々難しいものであるが、然し出來る限り一緒に頂戴する樣にし度い。下女や下男が居れば、それも一緒に頂く樣に心掛け度い、お客樣があればお客樣も一緒の方がいゝ、そして主人も、子供も、下女も下男も、すべてが同じ樣に、同じ物を頂くといふことは、最も尊い佛の平等の敎に通づる道である。然るに下女や下男には殘飯の不味ものを食べさせ、主人や子供だけは贅澤三昧をするとか、お客樣だけに特別のものを取つて、家族の者だけはお香の物に茶漬で戴くなどといふ區別は、禪的見地からは最も排斥すべき態度である。それは餘りにもさもしい人の心といはねばならぬ。一味平等といふことは決して猫も杓子も一緒にせよといふのではないが、食物だけは皆同じものにするといふ意味である。同じ粗末なものを差上げても、その取扱ひだけお客樣はお客樣の樣に鄭重にすれば、一家揃つて歡待せられたその心持が有難くなるわけであらう。

更に食物に對して不滿を持たないといふことについて、五觀の偈といふのが最も尊い敎であ

ると思ふから、特にこの五觀の偈について述べよう。

「一つには功の多少を計りかの來處を量る」

之が五觀の偈の第一句である。この意味を熟考すると、無量の意義が見出される。第一御飯を頂戴するに當つて、其の御飯の效果の多少を考へて見るがよい。吾々が御飯を頂戴することによつて、この貴い生命を維持することが出來る。古より命あつての物種といふが、世の中で何が大切であるといふても、生命ほど大切なものはあるまい。その大切な生命を養つて呉れるものが食物であると考へるならば食物ほど、御飯ほど大切なものはなく、隨つてその功德の廣大なることは推して知るべきである。故に今御飯を頂戴する時に當つて、先づ御飯の功德の多少を能く考慮して頂かねばならぬといふ御誡めである。これは私の新解釋である。

次に其の御飯は如何にして吾々の口の中に入るやうになつたか、其の御飯の因つて來つた處を考へる。一粒の御飯でもそれが吾々の口に入るまでに何れ程の手數や勞力が要つたかを考へれば殆んど測り知ることは出來ない程である。俗にも米は種子を苗代に蒔いてから米となる迄

に八十八回手を經るといふが、種子を蒔く迄に已に十數回の手をかけて苗床を造り、そこに種子を下してからでも、さては施肥だ、植付けだ、田の草取りだ、株間打ちだ、刈り入れだ、臼挽きだと、その手數は恐らく百回や百五十回の手數ではなからう。米一粒にかゝる手數を經て居ることを考へたならば、たとへ一粒でもどうして粗末に出來やうか、勿體ない、罰が當るといふ觀念が起きて大切にせずには居られなくなつて來る。故に靜かにかの來所を量れと敎へられたのである。尤もこの一句の見方はこれだけには止まつてゐない。

「三つには己が德行の全缺を忖つて供に應ず」

吾々が御飯を頂戴するのは決して、無意味に頂戴するのではない。自己の人格を完成せんが爲に御飯を頂戴するのである。換言すれば、自己の業務を完全に勤むる爲に食事をするのである。故に先づ自分の行爲に缺くる所がないかを考へ、もし御飯を頂戴するに足るだけの務を果してゐなかつたらば、御飯を頂戴する資格がない事になる。そこでいつも大威張りで御飯を頂戴して愧かしくない丈の、業務に精勵しなくてはならぬ。昔百丈禪師は「吾に坐食の德あらず

一日作さざれば一日食はず」と仰せられて、一日の業務に値する丈の仕事の出來なかつた日は一日御飯を戴かれないで謹愼せられたといふ。此處に最も嚴肅な禪の敎を見ることが出來るのであつて、實に吾々には頂門の一針ともいふべきであらう。吾々は一日作さざれば一日食はぬと迄嚴格には參らぬとしても夕方その日の行跡を反省して、今日は豫定の仕事を怠り遊んでしまつたと思ふ樣な時には、夕食だけなりとも遠慮する樣に心懸けたなら最もよい修養になるであらうと思ふ。然しそこまで行かなくとも、この一句を唱へるならば食物の不平位は曖にも出せなくなるであらう。

「三つには心を防ぐは過の貪等を離るゝを宗とす」

これは通常「三には心を防ぎ過を離るゝは貪等を宗とす」と讀みならはされて居るのであるが、私の信ずる處に從つて、少時上掲の如く讀み改めたのである。人の心には善心と惡心とある。尊い眞如佛性などゝ同一視する心もあれば、窃盗、强盗、殺人等を働く心もある。そこで吾々人間は惡しき心を防ぎ、善良なる心を以て總ての方面に活動するやうにし、過を犯さな

い樣に努力しなくてはならぬ。それに就いて佛敎では過を犯す根本は貪瞋痴の三毒であるとして居る。卽ち貪はむさぼる心であるといつて居るから、食事に當つて自分はこのむさぼる貪慾等をなくする樣に努力するのを根本とするのである。殊に食事といふことに就いては、人間といふものは隨分いやしいものであるから美味しいものだと貪り食ひ、不味いものだと女中や御母樣をどなりつける。普通のものだと「又か」と愚痴をこぼす。それでは人格の向上は愚なこと、たとへ外に立派なところがあつても差引かれてしまふ。そこで食事に當つて一日の生活に於て、貪り、瞋り、愚痴等の過ちがなかつたか何うかを反省すると同時に、それ等の過を犯さない樣に心に銘ずるのである。

「四つには正に良藥を事とするは形枯を療ぜんが爲なり」

これは美しい食物でも、不味いものでも、分相應に戴いて、食ひ過ぎや、ハンガーストライキをしないこと。卽ち病人が醫者に診て貰ひ、お藥を頂戴するのは、病氣を治療して身體を保たんが爲である。今我々が御飯を頂戴するのは、丁度病人が良藥を戴くやうなもので、捨てゝ置けば餓ゑの爲めに死なゝければならぬ破目に至るが爲である。故に御飯を戴くのは贅澤や榮耀の爲にするのでもなければ、又徒らや戲れの爲にするのでもない。只人間の務めを果すために榮養となり游養となり、又血となり肉となるものを適當に戴いて、身體を健全にし、而して人間としての正しい務めを果すやうにするのである。美味しいからといつて、牛や馬の樣に食べたり、不味いからといつて、今日は嫌だなどと駄々をこねて、母親や女中を困らしてはならないといふ誡である。

「五つには成道の爲の故に今此の食を受く」

これは御飯を戴く究極の目的を示されたものである。我等が御飯を頂戴するのは、前に述べた如く、我が身體と生命を保つ爲ではあるが、如何に大切な生命だからといつて長くとも百年を出ない身を何故に大切に保たうとするか。何れ亡びる身體ならば大切な食物を攝るに及ばぬではないか、然るに之を敢てなすのは何の爲であるか。これについて色々なことをいふ人もあらうが、佛敎では佛陀の敎を實踐する爲であるといふ。それを言葉を變へていふならば、人の

人たる道を實踐し、この世に生れて來た使命を完全に果す爲であるといふのである。更に言葉を變へていふならば、教師は教師としての、學生は學生としての、重役は重役としての、社員は社員としての、夫は夫、妻は妻、子供は子供、各々その地位と職責に從つて、その職責を完全に遂行することである。それが出來れば結構、佛道を成就したことになるのであるから、大切な食物を戴くのも要するにその人としての道を全うする爲に戴くのであると自覺して、その一日の生活を反省し、來るべき一日の計畫を樹てゝ行く樣にするのである。

斯ういふ意味の深い五觀の偈を家族一同が唱へて、お互にその生活を反省し合つて行くならば、その家庭は別段何を行はなくても自然佛教の眞意に叶つた家庭となり、期せずして家庭禪の目的を達する樣になるであらう。

六、家庭に於ける宗教的行事

已に一言述べた如く、家庭に於ては、子女を教育する立場よりも、又は同時に自分達の反省

報恩の立場からも、何等かの宗教的行事を行ふことは必要なことである。それは今日學校教育に於て最も缺けて居る宗教的情操を涵養する意味に於て特に力說し度いのである。

そこで私は率直に家庭に於ける宗教的行事として、一、朝夕の禮拜、二、祖先の御佛事、三釋尊の記念日、この三つを何等かの形に於て、全家族が一緒になつて營むことを提言するのである。

一、朝夕の禮拜　家庭に於ける宗教的形式としては、朝夕の禮拜勤行が最も必要である。これを無さなければ、その人は如何に立派な言を吐いても、人間としての價値はないものと申しても過言とは言へまい。眞に宗教を信ずるものは、自然の結果として禮拜となり讀經となつて現はれて來るのである。又讀經によつて宗教の眞髓を體驗するものである。禪には信仰がなく坐禪する丈けで讀經や禮拜がないといふのは大いなる誤りである。信仰なき坐禪は外道の禪であつて、少なくとも正しい佛教の坐禪ではない。故に道元禪師は「日々三時に禮拜し供養して更に忠懃の心を生ぜしむることなかれ」とお示しになつて居る。唯禪に禮拜のことがないと誤

り傳へられたのは、禪は一色の辨道で、坐禪の時は徹底坐禪になり切つて他を考へないから、この時は禮拜はないのである。然し禮拜の時も之と同樣禮拜切りになり坐禪を想はないのであるから、此の方を取り上げて云ふならば、禮拜はあつても坐禪はないことになるのである。それは只形式の上で異るだけであつてその源は一つである。人間である以上感謝の誠を捧げることは當然でありそこに暖かい人情味を感ずるので、近くは祖先に對する感謝の念、四恩に對する感謝、遠くは宇宙の眞理本體たる佛に對しての歸依となり、何れも必ず禮拜恭敬の姿となつて來るので、その姿そのまゝが坐禪の相であり、佛の相である。故に坐禪は忘れても禮拜恭敬することは忘れてはならない。之れによつてのみ圓滿なる人格が完成されて來るのである。

幼少の頃より常に心掛けて、佛壇を清潔にし、朝と夕に燈明を上げ線香を捧げ、珍しいものがあれば何をおいても先づ佛壇に供へることを覺えさせ、精神的には一家の中心を佛壇に置く樣にしたいものである。

二、祖先の佛事　然し朝夕の禮拜も習慣を形成すると、刺激が薄くなつて、精神的感化も少

くなるやうに感ずることがある。斯る場合に稀にある形式に從ふならば、多くの刺激があつて著しい效果を擧げ得ることもあらうと思ふ。この意味から見ると年に一回なり二回なり行ふ年忌佛事或はお盆の靈祭り、或は花祭り成道會、涅槃會等を家庭に於いても懇ろに行うたならば、一層感銘を深からしめることだと信ずる。之等はもとより家族主義を中心として形成されて居る我が國體に基く、民族的意識即ち報恩報謝の念より生じたものである。祖先の年忌佛事を營み、祥月命日等に供養を設けることは、殊に人間味の暖かい情景であつて、向後永く傳へなければならぬ美風である。人の靈は體と共に消えて失せるものではない。六道輪廻と稱して、生れ代り死に代り、その享くべき業報によつて六道に轉生して行くのである。この時に於いて、何ものが頼りになるものがあるか。孝行をしたい時には親がなしと言ふ、斯る場合我々の親を思ふ眞情は形が滅して居るからとてそのまゝに過されるものであらうか、可愛い子供に先立たれた場合、宇宙の何處に求めても消えてなくなつたものと考へ得るであらうか、靈魂の存在を認めず、世は只物質のみと考へた、一部主義者の徒輩に於いてすら盟友の墓前に額いた

時、思はず口を衝いた言葉は、「兄よ復た逢ふ」といふのであつた事を承知して居る。死せし者に再た逢はうと言ふは、科學的冷靜にある時は靈魂の無を說きながら、人としての眞情には有を肯定して居る爲と信ずるのである。我等の肉眼には見得ざる靈魂となり、輪廻しつゝあるものに對し、心から物を供へ祀るのは人情の常にして、必ず其の中に感應すべき功德を回らすといふ意に外ならないのである。目に見えぬ功德力が、やがて志ざす精靈に回向することが追善の最も大なる意義である。故に追善は必ず精神的でなくてはならぬ。玆に財寶二施の法要佛事の形式が起つた所以がある。故に家庭に於いては、法事年回を取り行ひ、菩提寺の住持を請じて追善回向をなし、親戚知己をその席に招きて燒香を願ひ、延いては供養として一席の宴を張り、故人の追憶談や境舊談に耽つて、ありし日の俤を偲ぶのである。けれども都市に於いては、多くは住宅が手狹であるから、寺院や料理屋に持出すのであるが、是等も何處迄も精神的供養を中心にしたものでなければならぬ事勿論である。然し是も現代的理論から言ふと、洵に不合理な事で、緊縮時代に故人の追善供養をするからとて、御馳走して飲酒するが如きは不合理であるとなすことも亦一考を要するのである。酒は無くとも御馳走はなくとも、追善も出來ば回向も出來る。寧ろ酒に醉ひ御馳走に飽くやうでは、追善にもならなければ回向にもならない極端に謂へば僧侶の讀經も無用なれば神官の祝詞も不必要である。舊友知己相集つて、誠心誠意、故人を追懷し供養すればそれで充分である。何も多くの金錢を投じて、法事供養をする必要はない。多くの金錢を費せば、勤儉節約を趣旨とせし故人の年回には、却つて供養にもならねば追善にもならぬ。地下に於いて泣いて居るに相違ないと論ぜられよう。成程之も一顧を要する理論ではある。けれども實際の問題より言ふと、一會の宴に陶然としてよい心持になり、一片の御馳走に靄然として悅ぶ處に、又理論を超えた意義があるものである。まして親戚一族が參集するにも、單に追懷談や讀經のみでは、如何に親戚でも遠方から來るものでなく、況んや禮儀としても遠來の客を歡待するのであり、且つ之れによつて相互の親しみを增し、吾等は同族である。血統續きであるといふ觀念から、團結力が鞏固となり、喜憂を共にし苦樂を同うし、親戚相扶け合ひ、同族共に救ひ合ひ、之によつて家族主義の本旨を最もよく發揮すること

が出來るのである。殊に報恩の觀念を鼓吹するには、祖先崇拜の一として、故人の靈を祀り、祥月や年忌等に佛事を行ふことが最も效果あることゝ信ずる。

年忌佛事の外に最も意義ある祖先の祭りはお盆の精靈祭であらう。元來お盆は盆正と並び稱せられ、正月よりも寧ろ時候の關係上一層盛大で民間にも盆踊り抔が昔から中々盛んであつたものである。然し正月に於いても、祖先の靈を祭ることに變りはないが、正月は神を祭るといふことが主となつて、祖先の靈に對しても新年に御挨拶を申し上げるといふ風であつたが、盆は專ら祖先の靈並びに志す諸精靈の御靈祭りであつて兩々相俟つて美しい我が國の風俗をなして來たのである。然るに明治維新以來、西洋の文化が侵入するに連れて、祖先崇拜の最も意義ある祭祀が段々と葬り去られて、今日では國祭でもなければ、民衆全體の祭りでもなくなり、僅かに寺院に於いて施餓鬼を行ふか、或は家庭に於いては奥樣か女中が內に精靈棚を飾り申譯的にお墓參りをする位のものであつて、盆の十五日と雖も主人は出勤し、子供は學校に行き、勞働者は汗で働き、盆であるからとて平素と何等異る所はない。誠に殺風景なもので

ある。田舍へ行くと昔ながらに一家擧つて盆祭りをなす所もあるが、學校役場等は平生通りで寧ろつとめてこの風俗を破壞せんとしつゝある傾向がみえる。殊に知識階級や學校の兒童には盆らしき感じは更に浮かばないのである。實に嘆かはしい事と言はざるを得ない。

由來我が日本は祖先崇拜を以て、國體の要素の一としてゐるのではないか。さればこそ學校教育に於ても祖先崇拜を敎へ、寺院に於ても熾にこの觀念を鼓吹するのである。それ程大切な祖先崇拜を基礎とする盆祭りが寂れ行くやうに國家が仕向けることはその意義が解せられぬ。今玆に新しく祖先崇拜デーを定めて、祖先崇拜を盛んにしようとしても、これ迄の盆祭り程國民の惱裡に沁み渡るものではない。故に祖先崇拜を徹底せしめんとする眞意があるならば、盆を國祭として、少くとも十四十五の兩日位は、諸官省は勿論、學校も會社も商店も悉くが休業して、主人始め家內全體打ち揃うて祖先の大供養を行ふことゝすれば、自然に國民の間に國體の本義たる報本反始の思想も勃興して、人情は敦厚となり、社會平和の基となるであらう。之によつて今日至難視されて居る兒童の宗教々育も完全に行はれ、情操の陶冶に多大の效果をあ

らしむることは贅言を要しないであらう。

然らば盆は如何なる意味か、盆とは盂蘭盆の略語である。盂蘭盆とは梵語で譯して救倒懸といふ。世の中に苦しみは澤山あるが、逆に吊下げられた程辛い苦しいものはあるまい。此の苦しみを救ふといふのであるから、世の中で一番苦しい苦を救ふといふ事が盆といふ言葉の起つた元である。救ふについても種々ある。貧困者に物資を與へるも、水に溺れんとする者を引揚げるも、尋ねる道を親切に教へるも、惱み苦しみつゝある人に同情を寄するも、皆是れ救ひである。亡き精靈を思ひ起し、追善、追孝の念に堪へず、その思慕の情は何等かの形によつて發表せずには居られないものである。故に至孝の尊者目蓮の故事に基いて七月十五日を盂蘭盆の當日と定めその前三日より特に精靈棚を設けて先亡の靈を祀り僧侶の讀經供養を享け、或は親戚故舊相集り、互に久濶を叙すると共に將來の親交を願ふこと猶正月の如くするのである。故に盆には施餓鬼がつきもの〻如くなつて居る。棚經と稱して檀那寺より廻るのは、家庭の精靈棚に於いて施餓鬼を修して廻ることより起つたものである。又叮寧な家では年々盆に

は施餓鬼會を自宅に於て修行する所も隨分ある。或は各家庭に胡瓜の馬や茄子の牛を供へるのは形式の上より、御先祖樣始め亡くなりし皆樣は、この馬や牛に乘つて、早く御馳走をおあがりにお出で下さいといふ、極めに純なる、優しい心の現はれである。美しき人情味の發露である。

斯の如くして祖先の靈を祀る時、その優しき心根は實に清淨潔白で、純眞無垢な心である。此の心を以て一心に三寶を奉請し、看經禮拜回向をなすならば、その善根功德は直ちに亡き者に回向せられて、それ〴〵苦を離れて解脱し、上四恩に報じ下は三有を扶くるは勿論、現身に於てもよりよき生活を營むことゝもなるのである。かゝる我々の眞情より發達し來つた所の盆祭であるから、今後益々盛ならしめ、以て家庭の禪化より延いては社會國家に及ぼさなければならぬものと信ずる。此の點よりすれば、お盆は國民全體が擧つて大供養をなすべき國祭日であつて、日本人である以上、基督教徒たると回々教徒たると、將又神道たるとを問はず、渾然一致して行ふべきであらう。

三　釋尊の記念日、更に佛教徒として忘るべからざるものに、教主大聖釋尊の誕生を祝する花祭と、その成道を記念する成道會と、涅槃を偲ぶ涅槃會の行事がある。之は三佛忌と稱して佛教徒としては忘るべからざる聖日でめる。

お誕生の記念日　釋尊は四月八日に降誕遊ばされたので、それを記念する爲めや祝ふために花まつりが行はれるのである。それが年と共に盛大になりつゝあることはまことに結構なことで各家庭に於ても寺院若くは各團體の花まつりに參加せられ、或は家庭的にもお祭をして花祭の眞意義を體得するやう努力して頂きたいのである。

釋尊の母摩耶夫人は印度の風習に從つて、生國拘城へお產の爲めに里歸りの途中、藍毘尼園に休息せられた。その際暑を避け汗を流す爲めに園の蓮池に水浴せられると、二匹の象が鼻で蓮華泥りの淨水を王妃の頭上に注いだ。やがて池を出て無憂樹の下に立たれ、美しく咲いた一枝を手折らうと臂を伸ばされた時、釋尊は右脇よりお生れになつたのである。すると天上から二匹の龍が現はれ金瓶の香水を注いで灌頂し、王子の出生を讃嘆したといふ。この花の月に

花の園で花を折る時花の上に生れたといふ因緣から花祭が起り、花で御堂を造り花で圍み花で覆ふのである。次に二大龍王が金瓶の香水を注いで灌頂した因緣によつて誕生佛に甘茶を灌ぐやうになり、その甘茶を飲むと夏病みせぬとか、その甘茶で歌を書いて入口に貼ると夏蟲が家に這入らぬといふやうなことまで起つたのである。

斯くして釋尊はお生れになると孤々の聲を揚げる代りに、周行七歩して「天上天下唯我獨尊」と獅子吼せられたといふ。かゝる不思議は今日の科學より以てすれば些か疑問ならざるを得ない。然し釋尊の如く何千年の間に一人の出生もないやうな大偉人の降誕なれば、普通の常識を以て律することは出來ないから、こんな事實もあつたであらう。我等の信仰よりすれば決して不思議ではないのである。解脫せる絕對界より觀察する時は、不生不滅、不增不減で、生れる時も成道した時も入滅する時も別に變化のあるべき筈はない。成道の時の光明の世界は、一貫して入滅の時も降誕の時も同一狀態でなくてはならぬ。故に釋尊が成道して得られたと言ふ神通妙用は、降誕の時に具備してゐるのである。されば生れ落ちると同時に「天上天下唯我獨尊」

であることは當然である。周行七歩と言ふのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を一歩一歩に踏破つて七歩目に止まつて常樂我淨の世界に出でたと言ふ意味で、七歩にして唯我獨尊と稱せられたのである。玆に重大な意義が存するのである。

既に唯我獨尊である以上、何事も意の如くならざるものはなく、右脇より生れることも、體をして香水を灌がしむることも決して難かしいことではないのである。圓通無碍の世界では左右の區別はないのである。乃至龍と香との區別もなく平等一味の洵に清淨潔白な法身の顯現で一點の汚れもないから、蓮華とか香水とか灌頂とかと形容されるのである。

玆に於ては敢て釋尊のみが唯我獨尊ではない。我々も亦六道の苦惱を六歩に歩み破ることが出來れば、七歩目には唯我獨尊と高らかに叫ぶことが出來るのである。唯我獨尊といふことは決して自慢することではないのである。宗教的最高峰、禪的大自覺を言ふのである。福澤諭吉翁が「獨立自尊」の四字を以て教育の根本とせられたのと同樣の意義ではあるまいか。獨立自尊と人格の最高峰を現はしたもので、人間は獨立して自己を尊重して行く事の如何に立派であ

るかを示したものである。獨立とは孤立してゐる事ではない。孤立といふのは他と關係を斷ち社會と交際を止めて、全く世間離れのした生活をいふのである。獨立は之に反して、能く世間と調和し、社會と交際し寧ろ進んで他人との關係を密にして、而も決して他人に迷惑を及ぼさず、社會に害毒を流さず、世間の發達を妨げず、却つて社會の爲を謀り、自己の存在によつて社會の進歩發達を促す、之れを眞の獨立といふのである。故に獨立ほど人類にとつて尊いことはない。眞に獨立出來る人でこそ自尊心も自重心も起るのである。玆に於て始めて唯我獨尊となるのである。自己が眞に尊重なるものとの自覺が出來たならば、決して自己を麁末には出來ない。無自覺な事は出來ない。餓鬼畜生に等しき無慚な行爲は出來ない。この自覺を促し、この自覺を讃歎する所に花祭りの意義が存する。家庭の花祭りも此の眞意を把握する手段とするならば尤も勝れたものとなるのである。

成道の記念日　十二月八日は釋尊成道の聖日である。釋尊は王城を出て出家せられて以來實に血の滲む難行苦行を遊ばされ、遂に成道せられたのである。即ち現代人の最も欲求して止まざ

る所の、高位顯官の最高である王位を捨て、最愛なる妻子も置きざりにして山中に入り、六年間も殆ど斷食の有樣で修行遊ばされた。之は中々出來るものではない、釋尊は小乘的なる物質欲を捨て大乘的なる精神欲を望んで撓まざる努力をされたのである、之偏へに衆生の拔苦與樂を目標にせられた慈悲の現はれである。物質的救濟には限界がある。若し物質によつて救はんとするならば、豐へ王家の全財産否國王としての權力の能ふ限りの財力を施されたとしても、二千五百年を經た今日我々にまでその餘德を蒙るとは考へる事も出來ない筈である。之れに反して精神的救濟は同時代に呼吸する者のみに限らず未來永劫に渉つてその德に浴する事が出來るので及ぼす所無限と言はなければならぬ。こゝに着眼せられた事は既に成道の第一階梯といふ事が出來よう。釋尊は苦行六年の後、徒らな修行は身心を疲勞せしめるのみで却つて益のない事を悟り、山を下つて尼連禪河で身を清められ、牧女難陀の捧げる牛乳の供養を受け、體力を養うて後、菩提樹下の金剛座に坐し正念思惟し給うて、四顰せる無量の惡魔を降服して、臘月八日に至り曉天の明星を一見して忽ち心地開明せられ、無上正等菩提を證せられたのである

此の時の御氣持ちをそのまゝ、一器の水を一器に移すが如く一子相傳し來つたのが禪である。此の故に禪は以心傳心と稱し他の宗派の如く、釋尊の應病與藥的に說かれた經文に依つて立宗したものではない。然れば禪宗は最も成道會を尊ぶのである。此の成道の大自覺は何であるかと言ふに、釋尊は成道の刹那「我と有情非情と同時に成道す。草木國土悉皆成佛」といはれたといふ。之がその根本である。釋尊御一人の成道は直ちに有情非情卽ち天地萬物の成道であるといふのであるが、之は成道の刹那に於ける大自覺よりすれば天地同根萬物一體と言つて、天地萬物悉く一如で、我の我とすべきでなく、他の他とすべきなく、全く自他平等の世界である。故に釋尊の成道は直ちに有情非情の成道である。我々も亦天地の間に生を享けたる以上釋尊の成道と同時に成道してゐるのである。

釋尊の成道に就いて今一つの方面は降魔である。降魔の威力のない者は到底成道の德を顯はすことは出來ない。魔とは梵語で害といふことである。我が希望を妨げ、我が計畫を滅し、我が幸福を奪ひ、我が進路を阻み、我が成道の邪魔をなすもの、之を魔と呼ぶのである。此の惡

魔には二種類がある。内魔外魔の二である。外魔は一に剛魔とも言ひ、外部より來襲するもので、不可抗力の天變地異とか、脅威を感ずる外部の誘惑、壓迫の謂である。内魔は軟魔とも言ひ、内心より發するもので、名利の誘惑、衣食住に關する貪欲、性的慾望、睡眠の貪り怠惰等の煩惱妄想は皆之に屬する。

外魔は剛魔であるから、其の受くる苦痛も強いが、之に對抗する意力も強烈となるから、存外其の苦痛に堪へ得るものである。之に反して軟魔は直接の苦痛は左程でなく時としては却つて快感を伴ふものである。從つて知らず識らずの間に之に喰ひ込まれて終には拔き差しのならぬ破目にまで追やられるものでゐる。王陽明は「山中の賊を破ることは易く、心中の賊を破ることは難し」と言つて軟魔の恐るべきを道破して居る。廬山の慧遠禪師も「逆境は打し易く、順境は打し難し」と言つて居られる。逆境に遇ふと勇氣百倍して、之を打開して行くけれども、順境に處しては、順境に馴れ易く、自己を三省して過なからしむることは容易ではない。外科の手術は身を切り骨を刻んで大いなる苦痛を伴ふが、比較的治癒が早い。反之急激な苦痛の

伴はない慢性の病氣は容易に治癒し難いのと同じである。

此の外的剛魔を打ち破り、更に内的軟魔をも征服して、無碍自在となる人が、眞の人生の勝利者である。この瞬間を成道と言ふのである。故に成道と言ふも、降魔と言ふも、紙の裏表の如きものである。降魔がなければ成道せず成道せざれば降魔は出來ぬのである。消極的に言へば降魔であり、積極的に言へば成道である。而も内的軟魔を降服し盡せば、外的剛魔は容易に降伏し得るのである。そしてこの内魔を降伏する捷徑は坐禪であり、看經禮拜である。而もその根源は歸依三寶である。熱烈な信仰である。家庭に於ける成道會は、此の理をよく會得して家内一同打揃つて、釋尊の成道を偲び、佛前に獻香禮拜し、至心に懺悔し、三寶の御名を稱へて歸依三寶の功德力によつて降魔をなし、釋尊と同時成道の大自覺をなすべきである。

涅槃の記念日　釋尊は古今獨歩の大偉人であらせらるゝので、御入滅の狀況も亦人並とは大いに異つて居る。今より二千五百有餘年の昔、二月十五日の眞夜中に、拘尸那城外、跋提河の畔、娑羅雙樹の間に於いて御入滅になつたのである。其の時は天地も悲嘆の情を呈し、萬籟寂

として聲なく、四方より繁り來る生類は五十二種、其の數幾百千なるを知らざる程であつた。此等大衆に圍繞せられた大聖釋尊は、濛として七等覺支八聖道と申す、今日遺敎經と稱して居る敎を說き、頭を北に右脇を下にして獅子王の寢姿のまゝ、大般涅槃の相をお示しになつたのである。

一體釋尊は一國の王子としてお生れになつたお方であるが、御誕生の時は藍毘尼の花園で、咲き匂ふ無憂樹の下にお生れになり、御修行は無論寒冷の襲ふにまかせた所であり、成道の折も、晴れ渡る大空の下、菩提樹下に草の褥を敷き、金剛座として成道せられ、今又御入滅の折も娑羅雙樹の下であつて金殿玉樓の中ではなかつた。絹布の夜具に伏されたのでもない、廣き靑空を天井となし、皎く星を空に眺め、厚き大地を床として大往生せられたのである。此處に釋尊の偉大さがあるのである。故に御入滅と同時に東西の兩樹は合して一大樹となり、靑々として居た娑羅の葉は忽ち白色と變じて悲しみの姿を現はしたと申す事である。もとより其處に集まつた人々は申す迄もなく畜類迄も悉く悲嘆に沈み、阿難尊者の如きは大地に泣き伏して

悶絕せられた程である。

此の時の御說法卽ち遺敎經を拜して見ますと、これより後我が敎を聞く者が、敎に從つて法の如く行ふならば、そこに如來の法身は現前して、永劫に滅することはないとの意味を述べて居られる。之によつても知られる如く、釋尊の肉體は亡なつても、釋尊の御精神は何時の世迄も滅ぶことなく、その敎と共に永久に赫灼たる大光明を放ち世界人類の大燈明となつて一切衆生の煩惱の闇を照し、幾千萬の生靈を救はれるのである。故に我々はその敎によつてのみ生死透脫の大安心を得、躬らお示しになつた如く、涅槃の境地に到達し得るのである。「傳へ聞く鶴の林の夜半の聲、吾が子を思ふ言葉なりけり」と古歌にあるが、釋尊は法華經にも「三界は皆是れ吾が有なり、其の中の衆生は皆是れ吾が子なり」と仰せられて居るので、四十九年の間席の暖まるに遑もなく、只管一切衆生の爲に說法敎化を續けられ、最後の床につかれても猶、子を思ふ大慈悲心を以て切々たる御敎をお示しになつたのである。この大慈大悲を思ふ時、只感謝の念に暮る許りで日々三時に禮拜供養をするのであるが、特に二月十五日の涅槃會に際して

は、寺院に參詣して親しくお涅槃の模樣を拜し、家庭に於いても特に香華供物を新たにして、或は說法を請ひ、或は經を讀んで、釋尊の大悲力は、眞理と共に永却我等の前に顯現し給ふことを信ずるやう努めなくてはならぬのである。

七、日々の修養

最後に私は以上の樣な見地から、禪を家庭的に實踐する爲に、次の樣なモットーを主張して居る。それを紹介して、本書の結語にし度い。

朝は希望に起きて禮拜
晝は愉快に働いて報恩
夜は感謝に臥して安心

朝の氣持は大切である。一日中の仕事の能率は大抵朝の氣分に支配されることが多い。斯かる大切な朝の起床である。愚圖々々しながら寢床の中で新聞をよみ、煙草を喫んで、さて時計

を見る。出勤の時間が刻々に迫りつゝあることを承知で再度夜具の中に滑り込む。遲刻を氣にして家人が呼び起す、一言二言では返事もしない。仕方がないから聲を大にして叫ぶ、やつと這ひ出して碌々顏も洗はぬに朝飯を掻つてブツ〳〵言ひながら出勤する。こんな朝に限つて電車が遲い。やつと來ても滿員である。會社へ着いてみると皆已に勤務中で後れた者の顏をジロ〳〵見つめる。給仕の挨拶の仕方も異る。かうした朝があつたならば何うしてその日一日樂しい仕事が出來るか。覺醒と同時に床を離れるかどうかといふ些細の事がその一日を左右するのである。之を考へたならば朝の氣持も離床の瞬間に定まる。斯かる惡風を避けるには如何にすべきか。先づ何よりも希望を持つて起きることである。よし今日こそ無駄のない一日を過して見せるぞと大きな希望をもつて、目覺めると同時に床を離れるがよい。而して身仕舞を終つたならば、朝の淸爽な氣持の中に神棚へ燈明を上げ皇室と國家の彌榮を祈念し、續いて佛壇に獻燈香して、至心に合掌禮拜し、御先祖の靈に朝の挨拶をなし、今日一日の幸せを祈るのである。之が終つて始めて一同に挨拶を交し、禮儀も正しく朝の食事を終り落付いた氣持で今日の

腹案を拵へ然る後、悠然と出勤したならば如何、目に觸れるもの悉く己の心を樂しましめ上役の濟面さへ笑くぼに見えて一日中樂しい仕事が續けられるのである。斯る日は能率の悪い筈がなく、それが幾日も續いたならば如何。贅言を俟つ迄もあるまい。

「書は愉快に働いて報恩」働け〳〵愉快に働け、上述の通りの朝の氣持を保ち續けて一日中愉快に働くのである。此の働く基は朝の禮拜によつて得たる處の信念の力によるものである。而も働きは何の爲に爲すのであるか、皆之報恩謝德の爲にするのである。決して自己の榮達や利害の爲めのみに爲すべきではない。現代人は自ら懸命に働く人も少いが、偶々働く人がありとすれば、大抵は私利私慾の爲に動いてゐるのである。勿論生活の爲めにする働きではあるが、その生活は何の爲めになすのか、必ず成道の爲めに生活するのでなければならぬ。此の大目的の爲めにのみ人間は生れ代はり死に更り生活を續けて行くのである。而もその生活を續ける上には種々の恩惠を蒙らなくてはならぬ。佛敎は之を四恩といふ。卽ち國王の恩、衆生の恩、父母の恩、三寶の恩是である。我々の生活には必ず國土を要する。理想的國土が必要である。世

界廣しと雖も理想的國土は少ない。季候風土に惠まれて居ても國家の組織に不備がある。何れを顧みるも我が大日本帝國ほど理想的國土は他に類を見ないのである。上に仁愛なる萬世一系の大君を戴き奉り、萬世渝ることなき國是を有し、下は之を輔翼し奉る忠良なる臣民がある。君民一體萬古比なき君主國である。尙氣候風俗共に惠まれた文明國である。かゝる國土に生を享け、一天萬乘の大君より、畏くも忠良なる臣民との信倚を辱うし、絕大なる御恩德を蒙るのである。之を想ふ時、一刻としてその御鴻恩に報ひ奉らずには居られない筈である。又我等の生活は社會共同の生活である。社會集團の生活をなす以上必ず衆生の恩を蒙るのである。衣食住凡てが他人の作りしものであることは勿論、一呼吸にも天地萬物の恩惠に依らなければならないのである。又我等は人として此の世に生を享ける。必ず父母を俟たなければならぬ。父母なくして未だ此の世に生を享けたる例をきかぬ。その恩や鴻大である。況んや形を生じて以來養育の大恩をや。我等斯の如き大恩に報ひ奉るべく成道する爲めには、必ず正しき敎を聞かなくてはならぬ。正しき指導者を賴らなくてはならぬ。正しき指導者とは何であるか。佛

法僧の三寶に他ならぬ。三寶に歸依することに依つて始めて成道することが出來るのであり、日々の行持を完うすることが出來るのである。斯る四恩に報ずるには日々の行持を正しく如法に行ふ外はないのである。道元禪師は「其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし」とお示し下されて居る。故に我々は一日愉快に働いて以て報恩の誠を竭さなければならぬ。

「夜は感謝に臥して安心」晝は活動の時であるが、夜は休息の時である。明日の愉快な活動の爲めには、今夜の休息がなくてはならぬ。休息の最なるものは安眠に如くはない。安心して眠る、之ほど極樂世界はあるまい。「世の中に寢る程樂はなかりけり浮世の馬鹿が起きて働く」なる程寢るより樂はないのである。然し眞の安眠は安心しなければ出來るものではない。輾轉反側した擧句の果、アグリンとかカルモチンとかを呑んで、その力で腦神經をしびらして漸く眠る。こんな事で眞の安眠が得られるか。斯る人にとつては、寢る程樂はなかりけりではなく寢るのは地獄へ落るやうなものである。然らば安眠の基をなす安心は如何にして得られるか。

それは禪的修養の外にはないのである。此の修養は又感謝の念が基礎になるのである。一日愉快に働いて家に歸つて來た。愉しい夕食も濟み、靜かに今日一日を振り返つた時、そこには一つの驚異を發見する筈である。即ち今日一日、よくも無事につとめを終られた、といふ事之である。之は日々繰り返されて何でもない事であるが、靜かに考へる時、朝出てから夜歸るまで無事に過し得るといふことは稀有なことである。幾度か危險に直面しながら、而もよく無事に切り拔けて居るものである。仕事は無事に終つたとしても、一歩道路へ踏み出した途端自動車に衝突したら如何。かゝる例も決して僅少ではない。

我々の左右には常に幾人かの不幸に落ちつゝある人があるのである。其中に於て先づ無事に寢床に居る自己を顧みたならば、自らなる感謝の念が生ずる筈である。これこそ目に見えぬ大いなる力に對する感謝の心である。九條武子夫人の歌には「大いなるものの力にひかれ行く我が足もとのおぼつかなしや」とあるが、此の大いなるものといふのは、今有難いと感謝して居る對象である。之は具體的には前に述べたる四恩でなければならぬ。この四恩は何時如何なる人

〳〵も如何なる場合でも必ず施されて居るものなのである。之を自覺した時始めて感謝の念が生ずるのである。此の感謝の念がなければ眞の日本精神は生れて來ないのである。この自覺を除いては禪的信仰は成り立つものではない。而も此處に於いて始めて眞の安心を得るのである。此の安心がやがて快よい安眠となり、それに依つて明日の希望ある朝となるので、斯くて〳〵日々の行持が滯りなく行はれて行くのではあるまいか。

（完）

著者
検印

昭和十二年十一月二十三日印刷
昭和十二年十一月二十五日發行
（定價金參拾錢）

著者　中根環堂
發行者　佐々木喆山　東京市牛込區辨天町一五七番地
印刷所　秋山印刷所
印刷者　秋山吉之助　東京市淀橋區角筈三丁目一五一

發行所　和光社
東京市牛込區辨天町一五七
振替東京四六二二六番

終

和光社發行